

世界市民とホスピタリティ

——「隔ての壁」を、取り払うために——

シンポジスト ボランティア学生代表・中川賢太郎（学生の目線から）、大阪府立大学教授・岡 勝仁（旧住民の目線から）、和泉市議会議員・浜田ちあき（新住民の目線から）、桃山学院大学非常勤講師・大野順子（海外のフィールドから）、桃山学院大学教授・山川偉也（司会・コーディネーター）

【山川】先ほど中山さんから北朝鮮による日本人拉致事件の話がありました。これも「隔ての壁」と申しましょうか、かの地の人々と日本人との間の壁が大変大きいものがあるということであろうかと思います。

このシンポジウムのねらいは次の点にあります。現在の大学に求められている重要課題のひとつに「地域との連携」・「地域貢献」があります。大学の持つ知的財産を地域の人々と共有するということです。私たちが地域の人々との連携を考えていくうえで重要なことは何であろうか、どのような問題を抱えているのだろうか。日本の豊かさとは裏腹に子どもから高齢者にいたるまでの1人1人が分断されて孤立している状況がありはしないか。1人1人の間に「隔ての壁」があって、それが人々の自由で平和な生活を脅かしてはいないか。

本日のシンポジウムのテーマは『世界市民とホスピタリティ』ですが、「ホスピタリティ」という言葉は、もともと、異国の、外来の客、ないし社会的に差別されたり傷ついたりしている人々を暖かくもてなす施設としての「ホスピス」に起源をもつ言葉です。ホスピタリティの精神は歴史的にみて、たいへんに古い起源をもっています。私はギリシャを研究している者ですが、ギリシャには客人とか異人をもてなす古くからの伝統がありました。「フィロ

クセニア」がそれです。「フィロ」は「愛する」ことを、「クセニア」は「客人」とか「よそびと」を指します。そういうこととも関連して「ホスピタリティ」ということが語られてきたということです。「隔ての壁」を取り払い「ホスピタリティ」に富んだ社会を構築していくためには、何を考え、どういう方向を目指せばいいのか。本企画はそういう趣旨の下に企画されたということです。

本企画は、大阪府立大学の平成18年度の現代的教育ニーズ取組支援プログラムに沿って立てられました。すなわち、地域学による地域活性化と高度人材養成の事業がその柱になっています。共催として桃山学院大学、現在行われております大学祭実行委員会、そして和泉市、和泉市教育委員会の後援をいただいております。

それではシンボリストをご紹介します。みなさんから見て左から学生を代表しまして中川賢太郎さん。桃山学院大学文学部国際文化学科3年生。国際ボランティアサークル、ラブ&ピースの代表者。2002年に高校の生徒会を代表してバングラディシュを訪問されたそうです。ダッカに滞在していたときに宗教紛争、貧困などを目の当たりにして世界が現在抱えている問題に目を向けるようになったそうです。自分に何かできることがありはしないかと考えた結果、桃山学院大学に入学し2年時に本学がやっておりますインドネシアワークキャンプに参加。現地の学生と協力して児童養護施設の水不足解消のために貯水槽の穴掘りを行われたようです。

そのお隣の浜田ちあきさんは和泉市の新住民を代表してご参加いただきました。日本航空国際線の客室乗務員をなさっておられましたが、株式会社ビックコーポレーションの代表取締役を昨年退任され、現在は英会話スクールの学院長をなさっています。元少年補導協助手員、現在は和泉青年会議所のシニアメンバー、和泉市議会議員をつとめておられる。また、ピースウォーク実行委員会メンバーとして世界から核兵器と戦争をなくそうという運動にかかわっておられます。

旧住民代表ということで岡 勝仁さん。旧泉北郡松尾村のお生まれです。

京都大学工学部を卒業されて現在は大阪府立大学総合教育研究機構教授，大学院の理学系研究科の生物科学専攻教授をされています。いずみ環境くらぶ，いずみの国の自然館クラブの会員もされている。

最後の方，桃山学院大学の留学生を代表して大野順子さん。本学の社会学部を卒業された後，イギリスのヨーク大学大学院に留学されました。現在は本学の非常勤講師をされていますが，主な担当はボランティア論です。では，中川さんからご発表をお願いします。

【中川】本学には学生ボランティア団体間のネットワーク「桃山学院大学ボランティアネットワーク」というものが存在します。今回はそのボランティアネットワークを代表してお話をさせていただきます。私は高校時代にバングラディシュを訪問しました。バングラディシュはイスラム教を国教とする国です。当時イラク戦争の開戦によりデモや反日，反米の意識が高まっていたのですが，世界が抱えている宗教戦争や貧困を目の当たりにすることにより，国際問題を学びたいと本学に入学しました。

そして，インドネシアワークキャンプに参加しました。18日間のプログラムの中で，バリ島に滞在し，現地の学生とともに児童養護施設の水不足解消のために貯水槽の穴掘り作業を行いました。施設の子どもたちは訳あって家族と別れて入所しているのですが，その子どもたちと交流して家族の大切さ，自分が置かれている立場などを考えることができました。この国際ワークキャンプに参加して思ったのは，本当の意味での国際協力はアジアの人々と協働する，アジアの人々に留まらず，世界の多くの人々と一緒に時間を過ごし，相手を知ること，寄り添うことが大事だということです。私たちのメンバーはインドのコルカタにあるマザーテレサの施設やタイのエイズ患者のシェルターでボランティア体験をしています。国内では沖縄の学生や基地反対運動をしている方たちと交流したり，広島のパネル資料館で学んだりしています。そういった体験を地域の人々に知ってもらうための報告会なども開催しています。

隔ての壁を取り払うために私が考えるのは相手を知ること、相手の国を知ること、そして世界で起きている事実を他人ごとではなく痛みを共感すること、1人の命を共感することです。そういったことができて初めて世界の市民だと思います。「愛情の反対は憎悪ではなくて無関心」という言葉がありますが、日本人はとても無関心になっていると思います。国内でもたくさんの問題があります。虐待、いじめ、そういった問題に私たちは関心を持って本当に取り組んでいるのかなという、そうでないと思います。私たち学生ができることは、この壁というのは何かということを知ろうとする気持ちを持つことだと思います。「隔ての壁」を知って、それを一緒にどう乗り越えていくかを考えていく仲間づくりが学生にはできるんじゃないかと思います。

中山さんのお話にウズベキスタンと日本の子育ては似ているというのがありました。人を傷つけない、弱い者いじめをしない、うそをつかない、人をだまさない、そういった子育てを昔の日本はしていたと思います。いまの日本では、ちゃんとできているのかなという、できていないと思います。身近な家族や地域を大切にすることが、まず一番にできることではないでしょうか。身近なことから興味、関心を抱き、そして世界で起きている出来事を他人ごとではなく痛みを共感する、これが「隔ての壁」を取り払うためにできる第一歩ではないかと思います。

【山川】ラブ&ピースの活動方針としてアクト・グローカリー&チェンジ・マイセルフというのがあるそうですが、グローバリーというのはよく聞くけど、グローカリーというのはあまり聞きません。グローバリーとローカリーを合わせてつくった言葉だそうですが、そこに本学が掲げているような世界市民の理念と中川さんがおっしゃっている身近なところの家族なんかを大切に、それを広げていこうという視点、精神、が反映しているんじゃないかと思いますが。

【中川】「Think globally, Act globally」、これは国際協力の世界で用いられている概念で、地球規模で考え、身近なところで行動しようということです。さらに「Change Myself」というのは自己変革。自分が変わらなければ世界も

変わらないということです。つまり、世界に目を向け、人類共通の立場に立ち、問題意識を持ち、自ら考え、自ら行動していく。しかも、その活動は国内、あるいは国外どちらかに偏ることなく、どちらも重要な意味をもつことを念頭に入れバランスよく働きかけていくことを意味しています。そして、それらの取り組みを通じて参加する学生自身が成長していくという願いが込められています。

【山川】自分自身が現に住まっている地域、あるいは日本というものを中心として世界的な視野を持って考えていかなければだめだということでしょうね。それでは次に浜田さん、よろしくお願いします。

【浜田】私は20年ほど前に和泉市に引っ越してきました。そのころはこの地域をよくしようと、コミュニティを持つべきだなどということは一切考えていませんでした。そういうことに関心がなくても生きてゆけるもんだと思っていました。子どもが保育園に入園することによってお友達の保護者の方、先生と出会い小さなコミュニティの輪ができました。子どもが成長するにつれてPTA、自治会、子供会へと出会いの場は広がっていったように思います。仕事人間だった私は、「自分の仕事しか見えていないのではだめだ、周りにはいろんな仕事があつてみんないろんな思いで生活している、だからぜひ異業種交流すべきだ、またこの地で仕事させてもらってるのだから地域貢献に取り組みなければいけないよ。」と、周りから言われて、和泉青年会議所に入会しました。そこで青年会議所の理念である町づくり、人づくりの問題に約10年間取り組みました。また青年会議所では、主に自己啓発を学ばせていただきました、そして私を支えてくれる心強い人たちとの出会いが生まれました。見ず知らずの地に引っ越してきて、ここは封建的、排他的な土地柄とすることが多々ありました。でも、いまそれは、地域のコミュニティに踏み込まず、距離をおいていたからなんだなあと思っています。せっかくこの地で出会うチャンスがあるのだから、いろんなコミュニティに出て行き、いろんな組織やセミナー、イベントなどに参加することにより、和泉市のことをもっと知って、和泉市にかかわろうという気持ちになったのは30歳を過ぎ

てからです。

桃山学院大学が和泉市に移転してきて社会人聴講生として2年間勉強させていただきました。また桃山学院大学がインターシップ生を受け入れてくれる企業を探していると聞き、すかさず企業登録をしました。5年前からインターシップ生を受け入れています。世界の国からもインターシップ生を受け入れたいと思うようになり、2年前からは世界各国から教育関係の学生を受け入れております。イギリス、タイ、ドイツ、インドと続き、いまはフランスの女の子が研修しています。なぜ学生さんたちを受け入れるのかというと、外から感じた和泉市のことを教えてもらえるからです。この地域に貢献できることをしたいと思って始めたインターシップの取り組みですが、いまは私の方がたくさんのことを学ばせてもらっています。

私の今年のテーマは食です。食を通して地域貢献をしようと思って和泉市の郷土料理を調べてみました。この地域のおぞうには白味噌です。私の育ったところはおすましのおぞうになんですが、主人の実家に行ったとき白味噌の中におもちと一緒に小芋やらおとうふ、かまぼこなどたくさんの具材が入っているのを見てカルチャーショックでした。またこの地域では茶がゆを日常的に召しあがります。おかゆさんは白いもので病気のときに食べるものだと思っていましたので、茶がゆに出合ったときは驚きました。和泉市にはたくさんのイベントがありますので、この地域で生まれ育ってない方も、そういうイベントに参加して和泉市ってどんな歴史があるのか、どんな文化がどんなふうに出てきたのか、この地域の人にはどんな特性があるのか、ということに触れていただきたいと思います。新住民と言われている私はいろんなイベントに参加して、毎年新しい発見をしています。

和泉市に外国人登録をされている方の人数を調べてみました。現在、1999人、40カ国の人たちが住んでおられます。まったく知らない土地で暮らすには相当の努力と困難があると思います。和泉市では年1回ワールドフェスティバルというのが開催されます。自分の国の家庭料理をみなさんに食べていただく、民族衣装を着てみていただく。自分たちはいま和泉市で暮らしてい

るんだよということを知ってもらい情報発信の場として取り組まれています。そんな時必ずキーワードとして出てくるのは食です。食は人と人とを近づける一番の手段ではないでしょうか。みなさんの中に旧住民、新住民という壁を感じている方がおられるなら、どんな接点や観点でもいいですから、その壁を取り払うために何かひとつテーマを見つけていただけたらと思います。和泉市はいまや約18万人の人が住んでいます。小学校、中学校にはいろんな国籍の子どもたちも在籍しています。現在私たちは多文化共生時代に生きているんだということをお伝えしたいと思います。新住民であれ旧住民であれ、いろんな悩みを持っています。みなさんも壁を取り払って自分の悩みを話し合えるコミュニティをつくってみてください。小さなコミュニティがあれば、そこで自分の悩みを打ち明けることができます。私は壁は自分の中にあると思います。自分のからを破って外に出て周りで悩みを抱えている人たちといろんな話をしてみたいと思います。

【岡】私の生まれは旧村です。生まれた当時は、和泉中央駅はありません。和泉府中の駅まで1里半、歩いて1時間。ほんまにこのへんは田舎でした。いいことを言えば里山が広がって田んぼはあるし、小川はあるし、溝はあるし、いっぱい遊ぶところがあるという、そんな環境でした。浜田さんは閉鎖的なところだと思ったと言われましたが、まさに閉鎖の典型。特に私の生まれた唐国（からくに）というところはすごいところでした。しかし、内側から見ると非常にいい世界なんですよ。道を歩いたらみんな挨拶しますし、非常に結びつきが強い、百姓仕事は何軒かで協力してやっていくという、そういう思いやりの気持ちがあります。そういうのがだんだんなくなっているんですが、いまも残っているのは先月ありました地車の曳航です。だんじりです。祭りには子どもからお年寄りまで地元の者が全部出てくるんですね。その中で年1回顔を会わせて交流し、つながりができてゆくんですね。みなさんぜひ一度来てみてください。村の中は非常に思いやりがあります。論語の中にこういうのがあります。「人間の一生で一番大事なことは先生、何でしょうか、一言で言えば」と聞いたところ、孔子は「それは恕（じょ）だよ」と答えて

います。自分のしてほしくないことを他人にするなという思いやりですね。怒の気持ちが旧村にはずっとあります。

村には豊かな自然もあります。自然の中が遊び場でした。春になったら一面れんげ畑です。空にはひばりが鳴き、そこで花を摘んだり寝転がったりするわけです。夏には里山へ。草の中でキリギリスが鳴いています。これを捕まえるの、難しいんですわ。やっと捕まえたときには、ドキドキする感動があります。用水路のフナやらメダカを捕まえて、家に帰って水槽に入れてじっと見ていますね。自然の中にはいろんな生き物がいて、それぞれに個性があってそのひとつひとつが大事なんだなあ、そんなことを子どもながらに考えるようになりました。

いま私は大学でたんぱく質の構造の研究をしています。赤血球の中にヘモグロビンというたんぱく質があります。これは酸素を運ぶたんぱく質なのですが、150個ぐらいのアミノ酸からできています。こういう形でつながっていて、どのアミノ酸も大事な役割をしています。150個のひとつひとつが非常に大事。そのたんぱく質が集まってできるのが生命体、いのちです。なんら無駄な物はない。それを発展させると人間社会にも1人も無駄に生きている人はいないと。健康な人、病気の人、すべて1人も無駄な人はいない。こういう考え方につながってゆくわけです。

金子みすゞという方の非常に美しい詩がありますので紹介させてください。みなさんもよくご存じかと思いますが、「私と小鳥と鈴と」という詩です。

私が両手をひろげても、
お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、
地面（じべた）を速くは走れない。
私がかからだをゆすっても、
きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のように

たくさんな唄は知らないよ。
鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがって、みんないい。

金子みすゞさんは戦前の方で若くして亡くなられた詩人です。この人の詩に表れているのは私たちが大事にしていかなければならないひとつの課題だと思います。

確かに旧住民と新住民が対立するかたちはあります。唐国に住んでいる者にとっては、後からやってきた人たちが山は削るわ、田んぼはつぶすわ、たまったもんじゃないというのはあります。そういう意味では対立する構図はあるんですけども、「みんなちがって、みんないい」ということであればお互いを認めることになりますから、地域の連携がうまくいくんじゃないかと思います。これを発展させれば国と国との関係、民族と民族の関係、みんな違っているところがいいんだと、それをお互いに認め合ってやればドンドンパチパチもなくなる。狭い田舎のところから相互理解が始まって、広い地域につながっていった国際交流をして、いわゆる国際協調になるんじゃないかなと。そういう意味で「みんなちがって、みんないい」というのは非常にいい言葉だと思います。恕という言葉で表される思いやりの気持ちを地域に広げて、さらに国際強調へとやっていけないかなというのが私の提案です。

【山川】浜田さんは新しい社会の中でコミュニティの形成をしていくことが大事とおっしゃった。岡さんは生物工学からのアプローチということになるんでしょうか。150個のアミノ酸1個1個が極めて重要で、それがヘモグロビンを生かしてゆくということでしたね。「みんなちがって、みんないい」ということですが、それを実社会の中でどう実現していくかとなると、おのずから別個の問題が出てくるんじゃないかと思います。それに関連して「市民教育」という視点から、大野さんに発題していただきましょう。

【大野】阪神淡路大震災をきっかけに私たち一般市民が、社会のことに積極的にかかわっていくことが必要になってきました。私たちはいわゆる行政から

のサービスの受け手側という立場だったんですが、それが私たち市民からも発信できるという発想に変わってきたと思うんです。21世紀は市民の時代と言われてますし、これからますます私たちひとり1人が社会に対してどうかかわっていくか、かかわろうという姿勢が重要だなと思っています。

ホスピタリティとは何なんだろうということを考えてみました。日ごろあまり使うこともないし、たとえば海外からのお友達をもてなすというようなことを、なんとなく考えていました。ちょっと調べてみたんですが、いろんな意味があることがわかりました。まずいま言ったような心のこもったサービス、あと理解とか受容、受け入れるということ。3つ目になるほどなと思ったのはホスピタリティのひとつの意味にソーシャビリティというのがあったんです。ソーシャビリティというのは社交性ということなんですが、人や行動が社会にどうかかわっていくか、どう社会的になっていくかということなんですね。それを見たとき浜田さんがおっしゃった共生という言葉が、ひとつのキーワードとして頭に浮かびました。人間それぞれ個々に違います。そういう違いを持って自分らしく生きていく、違いがある人たちが共に生きていくことが私たちに求められている。そういう社会を創り出すことがホスピタリティじゃないかと思うんですけど。それにはひとり1人の意識改革が必要かなと思います。

私はいまシティズンシップ・エジュケーション、市民性教育というのを研究対象にしているんですけど、最近世界各国でシティズンシップということがいろんな場面で使われています。たとえば学校教育の中にシティズンシップの要素を入れるとか。欧米ではすでに始まっております。シティズンシップには地域の問題であるとか、政治的な問題であるとか、いろいろかかわるわけですけども、そういうことに対して私たちはいままで積極的に取り組んでこなかったんじゃないかと思います。海外に滞在しているときいつも思うんですけど、ヨーロッパとかはいろんな国と国境を接していて人の交流が日常的に行われています。そういう中で何か問題が起きたときにその問題と取り組むのは、市民のひとり1人だと思うんですね。人々の意識改革とか市

民性とかシティズンシップというものを、きちんとやっていく必要があると思います。そのひとつのキーワードになるのは学校教育じゃないでしょうか。学校が地域のコミュニティ・サービスのひとつの拠点になると思うんですね。この夏オーストラリアのシティズンシップ・エジュケーションを視察してきتانですが、ひとりの先生から聞いた感動的な言葉があるんです。ラーニング・イズ・ドゥーイング。学ぶことは行動すること。世界市民というような広い意味の市民には、行動することが求められるんじゃないかと思います。そういう意識をひとり1人が持つことが平和な社会、またいろんな違いを持っている人が住みやすい地域をつくっていくんじゃないかなと思って、その可能性に私は大変期待しています。

【山川】いま大野さんから「シティズンシップ・エジュケーション」に関する話が出ましたが、「市民」という概念と「世界市民」という概念とはではおのずから違いがある。必ずしも同じではないのではないのでしょうか。「ロンドン市民」・「和泉市民」と「世界市民」とでは、おのずから違いがある。いや、場合によればそれらが背反するケースがある。そこに「隔ての壁」ができてくるケースだって考えられる。その壁を乗り越えて「市民性」が「世界市民性」に連なっていくことを考える場合、その条件となるのは何であるのか。「世界市民」という普遍的なものにつながっていく基礎のところはどう考えればいいのか。

岡さんはそれを「恕の精神」であるとおっしゃいました。人の身になって考える。それが大事だと。そのことは、ドイツの哲学者カントが言った「相手の人格そのものを目的として扱え」ということにもつながっていくものだと考えられます。カントは「世界市民主義」を唱道しました。しかしそれは、「理念」としてはわかるが、あまりにも理想主義的すぎてそれを現実化していくのは難しいんじゃないかという声もある。「コスモポリタニズム」(最近では「ワールド・シティズンシップ」という場合もあるようですが)、すなわち「世界市民主義」を考える場合、さきほどのご発表にあった「新」住民とか「旧」住民の区分の下での発想自体が、内と外の対立を意識して、「隔て

の壁」を作ってしまう契機となる，そういうこともあるんじゃないでしょうか。それを突き抜けることこそが，いま求められているんじゃないでしょうか。これに関連して，なにか問題提起をしていただきたいと思いますが。

【中川】世界の市民と堺市民とか和泉市民というのはまったく別もんだと思います。身近なところから意識を変えていって，それが世界につながっていくと思います。選挙は市民の権利です。ところが投票率がすごく低いですね。自分たちが住んでいるところのことですら無関心な人が多い。まずは身近なことから考えていかなければならない，と僕は思います。

【浜田】コミュニティの形成にはいろんな方法があります。私は週に1回小学生から50代後半の人たちとサッカーをやっています。スポーツは分け隔てを忘れて過ごすことができます。私は子どもの問題にもかかわっていましたがで不登校児が通う学校に行ったり，子育てに悩んでおられる親御さんたちの所にも行きます。私の主人がだんじりが大好きですので，だんじりの輪ははてしなく広がっているかなと。自分の興味のあるテーマのコミュニティがきっと身近に形成されていると思いますので，まずそこからスタートできると思います。

【岡】みんなちがって，みんないい。これがやはり出発点だと思います。そこで，これをいかに実現するかになるわけですが，やはり教育だと思います。教育の大原則であるひとり1人の個性を認めたらうで，それぞれを成長させてゆく，これが基本だと思うんです。私は自然の中で育ちました。和泉市はまだまだ自然があちこちに残っています。この内田町の山手の方には非常に景色のいいところがあります。向こうの黒石から国分町にかけては日本で一番の風景と言われる場所もあります。そういうところが和泉市にはあるんだよということを子どもたちに話して，その自然の中で遊ばせて育ててゆく。その運動のひとつとして「いずみ環境くらぶ」というのがあります。退職された年配の方が中心になって和泉市の里山を守るなど環境保全の活動をしています。「いずみの国の自然館クラブ」というのもあります。「いずみの国の歴史館」というのはできたんですけど，「自然」の方は資料もないんです。

自然の様子、虫、魚、鳥、植物などについての資料をつくってゆこうという運動です。その中のひとつとして毎月第3日曜日に一般市民の方も含めて自然の中へ入って行きます。山や田んぼで生き物をみつけたとき子どもたちが感動します。目が輝くんですね。そういう教育を通じてひとつひとつの命の大切さを教えて、子どもたちも自分たちひとりひとりが大切なんだということを知る。そういうことが世界市民につながってゆくと考えております。

【大野】堺市民とか和泉市民というのは、行政単位で分けられた部分であって、世界市民というのは明らかに違うと思います。世界市民というのを定義づけるのは難しいですね。定義づけてしまうと、そこからもれてしまう層があって、じゃそれをどうするんだということになりますし。ひとつに決めてしまうと、そうじゃないものはだめなのかということにもなる。コスモポリタニズムの中で市民と定義づけるのが、いいのかどうかというのがありますね。

【山川】中山さんが北朝鮮による日本人拉致事件の話の中で、今後どういうふうにしていけばいいのか筋書きがあるわけじゃない、とおっしゃいました。それはいま私たちが問題にしている事柄についても言えることかもしれませんね。確かに、現実の問題として、大きな壁が存在するんですね。その壁を取り払っていくためには、どういう筋書きを描いてそれを解決していくかということが、極めて重要な課題であろうかと思います。なにしろテーマそのものが重い。しかもそれはきわめて重要な課題でもあります。これを解決していく本来の場は、広い意味での啓発発動であり、教育であるということになるでしょうが、いかにしてそれを教育のルートに乗せるかということですが、はっきりとした手順・筋道が分かっているわけではない、と私は考えます。「世界市民」という概念についても、「ホスピタリティ」という概念についても、同じことが言えるかと思います。今後のいっそうの努力をまたなければなりません。